

第3部：パネルディスカッション

川越 雅弘 (座長)

ブローハン 聡 氏

土屋 匠宇三 氏

上原 美子

岩田 彦太郎 氏

大塚 竜自 氏

松本 りえ子 氏

山中 馨 氏

川越：それでは、パネルディスカッションを始めていきたいと思います。このパネルディスカッションのテーマは、「子どもにとって最適な地域づくりを目指して」です。先ほど7名の方のお話を聞いて、「子どものニーズに合った支援が必要」という発言が、かなり含まれておりました。

今日は3つの論点で話を進めていきますが、まずは1点目、要は子どもの困り事とか悩み、どんな支援を必要としているのか、そういったところにまず気付かないといけない、把握できていないというところがあるかと思います。それをどうやってやったらいいのかというところについて、皆さんのご意見をお聞きしたい、これが1点目です。

2点目、そうした形で声を拾ったとして、子どもはどのような支援を必要としているのか、あるいは、その必要な支援を実現するためにはどうしたらいいのかということについて、それぞれのお立場からご意見をいただきたいと思います。

3点目、最後は地域づくりの話ですので、それぞれの方々自身がやっている守備範囲のところ、できることとできないことが多分あったかと思えます。そうすると、ほかの方々となつなっていく、地域となつなっていく、あるいは活動家の方々には学校となつなっていく、教育委員会となつなっていく、いろいろな所となつなっていくと、課題解決が実は地域全体ではできないんですね。

あるいは、行政との連携も必要ということになってくるかと思えます。そうした意味で、地域をつくっていくためにはどんなことをしていけないといけないかというところを、ほかの方の発言も聞いた上で、今日は皆さんのご意見を聞きたいと。この3点について、話を進めていきたいと思います。

この中には、直接支援をされている方もいれば、そうした支援者の方々を支援する立場の方もいれば、その仕組みをつくっていくところに関わっておられ

る方もいらっしゃる。いろんな立場の方が実は参加されておりますので、それぞれの立場、それぞれ自分らが支援をしている方がどうかという視点で、まずはご発言いただければというふうに思います。じゃあ最初、ブローハンさん。子どもの困り事とか悩みに気付いていく、どうやっていけば気付けるのか、どういうやり方がいいと思われますか。

ブローハン：そうですね、私は自分の立場から2つありまして、先ほどおっしゃっていた当事者視点っていうところと、あとは社会的養護の文脈から支援をしている現場のほうの、2つの視点で話をします。

1つ、先に社会的養護の現場のほうからお伝えすると、アフターケア団体っていわゆる団体さんって、実はもう全国に今、増えてきていて、社会的養護を経験した若者をサポートしようっていう取り組みの運動は、かなり動いているんですけども、一方で問題が、つながらないというところですね。つながらない理由としては、本人自身がそれを言葉に、まず言語化ができないっていったところとか、あとは人に対しての信用する、信用しないとか、伝える難しさとか、さまざまな要因があると思っています。

私自身は、困り事とかを話すっていうハードルの高さを、すごい身を持って体感した機会があって。それは、私の体験になっちゃうんですけど、26歳の時に初めてアフターケア事業所を知りました。そのタイミングで、ちょっと自分も困り事を抱えていたんですけど、虐待とかの影響だったり、長年、「1人でやらなきゃ」っていう思いがあって、アフターケア団体に連絡しようと思ったけど、打っていた文字を止めてしまったんですよ。

その時に、人にこの状況を伝えるのは難しいなと思ったんですけど、その後、社会的養護を経験した友達が、「アフターケア事業所に遊びに行こうよ」って言ってくれたのをきっかけに、たまたまつながることができたんです。まさに今の自治体の取り組み

でやっているのが、「遊びに行こうよから SOS につながる場所」の大切さです。その上で、交通費支給もそこが起点になったんですけど、そこにつながらないのは、やっぱりハード的な面につながらない、だったら、そこを準備しちゃおうっていうことで、来るハードルを下げたのです。

あとは、気軽に遊びに来るっていう感覚から気付いたら、自然の会話から SOS につながる場所、これをやってきた結果、やっぱり普段の会話からつながるようになったんですね。だけど、若者たちが SOS を伝えようってなるのって、言葉の文脈と結構、違いがあるかなと思っています。

例えば支援とか、アフターケア事業所とか、あと、大人が構えて「支援やるよ、おいで」みたいな、あのスタンスで来られるほど煙たがられるっていうか、嫌になる。ちょっと多くの大人、多分、うなずくかなと思うんですけど。そういう目線が大人向けだなって思うところが1つ。なので、課題、困り事ってみんな抱えてはいるけど、それがもっと彼らに近い言葉にすべきかなと思っています。

これは私の経験、学校にいた時もそうなんですけど、虐待のことを伝えるっていうのはすごく難しいけれども、例えば言語化以外で言うと、絵があります。例えば、毎日、子どもとの関わりの中でニコちゃんマークからむかつくマークまであって、今日はニコちゃんマークを付けている。そんなさりげない言語以外の表現から、彼らが伝えたい、または日常にある世界を、大人たちに伝えられる、話せる機会みたいなものがたくさん存在してればいいのにと 생각합니다。

なので、実は難しい内容ではなく、彼らの目線に近づける、そして、大人はそれをキャッチする力が必要になってくるのかなと思いました。

川越: ありがとうございます。土屋さん、いかがですか。

土屋: 今、ブローハンさんのおっしゃっていた話の中ですごく思ったのは、普段の会話っていうところが、ポイントかなと思います。よく、子どもの権利条約で、子どもの意見表明権なんていうふうにいったりしますが、あれって、壇上に立って「私はこういうふうに思います」みたいなのを言うんじゃないって、聞いてくれる大人、そういう大人が必要なんだと思っています。

じゃあ、子どもにとって聞いてくれる大人ってどんな人たちかっていうと、自分のことを分かってくれる人にしゃべりたいんですね。多くの子どもたちは、特に家庭に困難抱えていると、「どうせ、誰かに言ってもこの状況変わらないし」って思っているんです。けれども、ほんとは分かってほしい、知ってほしいんですね。

なので、子どもたちが今、どんな生活をしていて、何に興味があるとか。ほんとに、今だと『推しの子』とか。子どもが今、その世界の中にいるわけです。『推しの子』について、私ちょっと調べるね』っていう、こちら側から歩み寄るじゃないですけども、っていうのが必要かなというふうに思っています。

その子のことをよく知るには、私は職業上、おうちの中へ入ることが多いので、おうちの中に入ると全部分かります。あ、こういう生活してるんだって。子どもからしたら、自分のためにわざわざ来てくれたっていうので、この人だったらしゃべってもいいかな、そういうふうにするのかなって思います。ただ、そこまでなくても普段の会話って、私は身近にいる大人が平等に全員に、普通に「今日、何あった？」とか、「学校、こんなだった。あ、そう、大変だったね」とか、それぐらいでいいんだと思います。

もう一つ。元ヤングケアラーの方たちが、みんな、おしなべて言うことがあります。「あの時、自分のことを分かってくれる人がいたら全然違ったのに」っていうふうなことを、皆さんおっしゃいます。なので、われわれ大人は、ちょっとだけでいいんです、その子が今どんな世界を生きているか、家庭生活、学校のこと、それから前、聞いたことを、「そうか、こないだ、テスト 70 点だったのか」「今回、80 点だったの？ すごいな」。

こういうふうに、訪問で来てくださるお医者さんが直接、話、自分に関心を向けてくれたっていうのが、すごくうれしかったっていうふうに言うんです。なので、私たち大人は、まずはその子たちがどんな今を生きているか、それをちゃんと聞くだけで十分だと思います。まずは、そこから必要な支援っていうのが始まるのかなと思っています。

川越: ありがとうございます。上原さん、いかがですか。

上原: 今、土屋さんのほうからヤングケアラーについてお話があったので、そのことに触れさせていただきま。なかなか子どもの背景、経済的なことと家族のことというのは、見えづらいところがございます。そのような中で子どもも、小さい時から特にケアを担っている子どもたちは、ケアを担うことは当然のことで当たり前の毎日なので、自分たちがケアラーだということも気付かない状況にあります。

そういう中で、子どもたちが多くの時間を過ごす学校で、気付く大人が一人でも増やすことが重要かなと思っています。学校の先生方は、普段の生活の中で、児童生徒理解の中でたくさんの視点をお持ちだと思います。その視点の1つに、もしかしたらヤングケアラーかも、ケアを担っているかもという視点を持っていただくだけでも、十分だと私は考え

ております。

これは子どもたちだけではなく、学校生活を送る、教職員も含めてですが、それぞれが、お互いに関心を持っていると、小さな変化に気付くってということから、何かあったのかな、もしかしたらヤングケアラーかも、ほかに家で困っていることがあるのかもという気付きにつながるように思います。

1つの例として、私は小学校と中学校と高等学校に勤務する養護教諭時代がございますが、その時に、毎朝、校門に立って、「おはよう」っていう声を掛けておりました。その時に子どもたちがどういう返事をしてくるか。

元気よく「おはよう」って返してくれる子もおりますし、私を避けるかのように遠くを歩いていく子どもたちもいる中で、お友達と何かあったのかなとか、家で何かあったのかなっていうところに気付くこともありますので、お互いに関心を持って小さな変化に気付くってということも、子どもたちの背景にあることに気付く機会になると考えております。以上です。

川越：ありがとうございます。岩田さん、いかがですか、今までの話も聞かれていますか。

岩田：最初に気付く防波堤にならなければならないのが、多分、学校の先生なのかなと思いました。過去を振り返ってみると、こんなことがありました。ある女子生徒で、きょうだいがとても多くて、とても真面目で、でもおとなしくて、だから学校に遅刻してくるなんてことはまずなかった子が、中学校3年生のある日、15分か20分くらい遅刻して来たんですよ。毎日それくらい遅刻するような人もいますから、そのこと自体は大きなことではないのですが、そこで、「え？この子がなんで遅刻？」と、学年の先生たちがみんな思うわけですよ。それで、遅刻してきたその子に、すぐに「じゃあ、教室へ行ってらっしゃい」と言うのではなくて、「どうした？」と一言声をかけたら、「先生、あとでちょっとお話聞いてもらってもいいですか。」とその子は言いました。昼休みに話を聞いてみたら、実は昨日、家でこういうことがあったと。要するに、両親の間のいろいろな問題について今まで知らなかったことを、その子の出自に関わるようなことも含めて知ってしまって、非常にショックを受けたという話でした。

その子その子によって出し方は違うと思いますが、何か抱え切れないことがあった時に、自然と何らかのサインが出るんだろうと思います。そのサインにどれぐらい、われわれが気付くことができるのかということについて、やっぱりわれわれ教職員もそれぞれ個性があるので、得意・不得意といますか、感度の高いところ・低いところというのがたくさんあるので、子どもが集団の中で育つのと似ているの

ですが、教師も集団としてどう機能するかということがすごく大事なのかなと思います。

だから、学年の中にいろいろなタイプの先生がいるということが大事だろうと思います。それは年齢、性別や、個性の部分も含めて、いろいろな人柄の先生がいるということが大事だろうと思います。また、養護教諭の先生が気付いてくれることは本当に多いです。結局、生徒が体調の不調を訴えて保健室に行った時に、「おなかが痛いって言っているけど、そうではなさそうですね」ということはよく分かるので、そういうところの連携から分かってくるのがすごくあると思います。以上です。

川越：ありがとうございます。大塚さん、いかがですか。

大塚：把握に関しては、やはり学校というのが第一っていうのは分かりますが、われわれは、なかなか学校のほうには入り込めないというところがございませぬ。ですので、地域の中に第三の居場所みたいのをつくっていくっていう方向にしています。

ここで、先ほどちょっと思ったのですが、やはりいくら場をつくって大人がいたとしても、子どもに近づかないというか、大人の価値観を押し付けるような場だと、全く意味がないなっていうのを感じました。これはこの後の課題にもなってくると思うのですが、そういった方々の人材育成というか、マインドを変えてくるところを、われわれは担っていかなくちゃいけないのかなっていうふうに、あらためて感じたところです。以上です。

川越：松本さん、いかがですか。

松本：私たちが行っている支援としては、お子さんに直接お話をするっていうよりは、お子さんと一緒に遊んだりすることが多いんですけども、実際にお話するのは、お母さん方の方が多くて。どちらかという、親の支援としてつながっている形であって、お子さんから直接ニーズを聞くというのは、今のところなかなかないです。関わってる中で、お母さんの体調悪そうだなっていうところと、お子さんの状況を見たりとか。

フードパントリーとかだと、今だとやっぱりドライブスルーとかで、なかなかゆっくりお話をする機会がないんですが、車の中を開けて、先ほど、おうちの中に入れば状況が分かるっておっしゃっていましたが、やっぱり車の中も同じで、荷物がいっぱい積みっぱなしになっていたりとか、ここちょっと心配なご家庭だなっていうところは、行政のほうの担当の方に、「こういう方がいるんです」、お名前とかは伏せて、「心配な方、いますよ」っていうところで、情報を交換したりとかっていう共有はしたりしています。

それで、子どもの権利のお話もさっきあって、私、

子どもの権利には直接関わりないかなと思っていたんですが、アンケートで、自分たちのことをこんなに大人は思ってくれているんだって、お子さんたちは権利を知ると感じるらしいんですけども、その中の回答で、「お母さんが幸せだったら、僕も幸せです」というお言葉をおっしゃっていたお子さんがいて。

じゃあ親の支援、お母さんたちの支援を行っているということは、子どもの幸せにもつながっていると思ったことがあったので、このまま支援している団体の方々と情報共有しながらやっていけばいいのかなと思いました。

川越:ありがとうございます。こうした支援に関わっておられる方々の話を聞いて、山中さんのほうで、今までの話を聞くと、やっぱりこういったことをやっていく必要があるかなとか、ちょっと感じたところで結構ですので、何かあればお願いいたします。

山中:そうですね、大きく2つ感じたことがございましたので、分けてお伝えできればなと思います。1点目としましては、大きな話の中なんですけれども、こども家庭庁が立ち上がった中で、1つ大きな柱というのが「子どもの意見を聞いて施策を決めていこう」というものでございます。

子どもの意見を聞くっていうのは非常に、「じゃあ、ほんとに聞けばいいんだね」というわけではなく、今、いろいろお話を伺っていくと、本音を聞くためにはどうしたらいいんだ、どういうところでタイミングを計って、感度を測りながら、大人がどうやって聞くべきなのかっていうことは、課題だなっていうのを実感しました。単純に、聞くだけではなくて、聞くための仕組みというものを今後、子ども行政は考える必要があるなってことを、実感したところで。それが1点目です。

2点目としましては、現場サイドで子どもがいろいろ意見を言える場というところの部分のお話なんですけれども、子どもの貧困から始まって、困った子たちが第三の場所、子どもの居場所っていう所に集まればということで検討して、進めてきたところだったんですが、なかなかほんとに困った人、来ないよねと。先ほどおっしゃっていただいたとおり、ほんとに遊びに行こうとか、そういう広いところの部分から初めてそういうものが出てくるんだっていうのも、お話し伺っていて実感したところです。

ですので、居場所については、できるだけいろんな方が集まれるような場所が大事だよねと、その中でどうやって網を掛けてすくい上げていくかというのも、これ、行政として考えていく必要があるかなと思いましたので、今すぐ答えではないんですが、行政の課題として、仕組みづくりとしては、その2点を感じたところでございます。

川越:ありがとうございます。いろんなお立場の方からの話を聞いて、やっぱり仕組みとして、そういった安心して語れる場所というものがあるということは、すごく大事。それが家でも学校でもいいし、家と学校が厳しければ、それ以外の場所があってもいいし、いろんな場所があるということが、すごく大事なかもしれないというのがあったというところと。

それと場所があったとしても、そこに関わる人が、ちゃんと本人の世界を知ろうという気を持って関わらないといけない。自分らの価値観をある意味、押し付けたり、押し付けている気がなくても結果的に押し付けていることはよくあるので、実は、だから本人がどんな世界を今、生きているのかとか、何に関心を持ってるのかとか、何をしがっているのかというところをちゃんと聞いていくと、おのずと、こんなことをしてあげなきゃという気になってくるのもかもしれないな。

だから場所の話と、場所の中で関わる人のマインドであったり心の話、そういったところが必要なんじゃないかというところと。気付ける人がいろいろいるんですね。学校でも、さっき、学校の先生というよりも、もしかすると養護教諭の方のほうが気付けるかもしれない。多分、養護教諭の人のほうが安心して話せる人なのかもしれないですね。

だからそうした人がキャッチをするんですけど、キャッチをすることが目的ではなくて、キャッチしたものを関係者の人にうまく伝えて、対応していくというところにも、つなげていかないといけないというところにもなるかなという気がいたします。

ということで、今まで皆さんが、こういったニーズがあるよというところがいろいろ分かってきた中で、お子さんがどんな支援を必要としていて、そして、そんな必要な支援を展開するためには、どんなことをしていかないといけないかな、自分らが活動しているところと、そうやって活動している中で、もうちょっとこういうのができたらいいよなと思っていますところがあれば、少しお話をいただければと思います。ブローハンさん、いかがですか。

ブローハン:そうですね、テーマが壮大ですね。思うこといっぱいあるんですけど。今、私が悩んでいるところで、団体として今よく当たるケースについてお話をします。

私たちは社会的養護を離れた若者たちっていうことで関わっていますが、ほんとこの1年は、未成年で社会的養護に関わらなかった子たちとつながるようになりました。それには理由がいくつかあって、当事者のつながりが全国的に広がってきたこと、そして大人だけじゃつながらない、子どもたちって、SNSとかを通してつながるんですけども、それっ

て若者たちのネットワークが機能しているというところが、私たち団体としては、ここがすごく機能しているなと思っています。

いわゆる当事者ネットワークから SNS へつながって、「プロ、こんなのがあったよ」「こんな子がいるんだけど、どうしよう」みたいなっていうところから、実際に関わるケースも増えてきました。

よくあるケースが、いわゆる未成年で、家庭にいて、社会的養護、いわゆる守られる安全な空間にいない子を、どう安全な場所に連れていくか、または、どうその子が情報を得て、本人が自己決定できるかっていうところを、関わっています。結局、児童相談所の判断にすごく左右されるっていうところが大きくありまして、そこが今、ネックになっています。

今、お話の中でも、子どもの権利のお話がありました。ヤングケアラーも含めて、子どもの権利が守られていない、そして自分が安心してそこに住めない環境なのに、判断としてはやっぱり家庭復帰、家庭見守りってのが多く判断されてしまう。この怖さをすごく最近、体感しています。この話の中に、気付く人が仮に連れていったとしても、結局そこで帰されてしまうと、私たちもそれ以上いけないっていうのが最近、ネックとしてあるので、そこをどうにかしたいと思う気持ちはあります。

児童相談所の人が悪って話ではなく、マンパワーも足りなかったり、保護できるような場所がないという課題も抱えてはいるんですけど、解決策として思っていることとしては、今、原則、家庭復帰を目指しています。これからも社会的養護に関しては、基本的には家庭で育つことがいいよねってされています。それは大いに賛成なんですけれども、それが理由になってしまって、親に返さなきゃというふうに、命の判断の優先が、仕組みが優先されてしまわないようになってほしいなと思っています。

なので、大事になってくるのが、まず子どもが話せる場があること。そして、安心できる場所と安心できる人のお話をされていましたが、秘密を守ってくれる人、自分の立場だけに寄り添ってくれる人が、地域だったり、子どもの住んでる世界に、そういう大人が一人でもいるって思うだけで、やっぱり希望につながっていくんじゃないかなと思っています。

なので、そのためには、まず子どもの権利ベースで言うと、学校の中、地域の中で子どもの権利が守られる、または育まれる、自分の意見が言っても、ここにいてもいい、自分のことを話してもいいっていうような環境が、あるかどうか、それはすごく今の日本の課題だなと私は思っています。

そしてもう一つ、気付く人の中では、防波堤って

岩田先生がお話ししていましたが、学校以外で、もし彼らのためだけに寄り添ってくれる大人がいたとしたら、聞く力を育てる機関はやっぱり必要になってくるかなと思います。なぜなら、これは命がそこによって委ねられるから。

僕はたまたま命が守られた側なんですけれども、判断を間違えたことをして、確かに対応を間違ったことによって、1人の命を失うかもしれない。ここは、今は優先的にやってほしいと思うので、やっぱり児童相談所の職員さん、または児童家庭支援センターの方、最初に話を聞く方は、子どもの声を聞くのに対してトレーニングを積んだ方が必要になってくるかなと思っています。

川越: 要は家庭復帰がゴール、それがよりベターだ、ないしはベストと思っている人も、もしかしたらいるかもしれない状況だよな。

ブローハン: はい。

川越: で、そこをゴールにされると、せっかくそこからある意味、逃れてきたっていうか、逃れたいと思っている人も、そこにまた引き戻される世界が一方であるということよね。

ブローハン: そうです。

川越: そこはやっぱりいろんな人で、「この子にとっての一番最適な目指すところって、どこだろう」というディスカッションがないから、そうになってしまう？

ブローハン: それはまず、自分の人生について自分が決定できないってところ、そして自分の人生について、自分がそこに意思決定が反映されないってところの、怖さがあるなと思います。

なので、大人がせっかくなぎました、つないだけれども、自分がその先どうなっていくのかを自分が決められないまま、しかもその未来がどうなっていくか全く分からない、家庭に復帰したらこうなる、または仕組みの中で育つところなるみたいな方向性が、しっかり話ができないままになり。その子は未来描けないから、もしかしたらその子は、一時保護所の場所とか、今関わってる大人が信用できないから、家に戻ったほうがまだましという声も上がってくるんです。

なので、自分自身がそこに意見が言えてない、または、まだ情報が届いてない、そして未来を描けないってところが、丁寧じゃないと思うところがあります。これは、子どもの声が置き去りにされてきた歴史もあると思うんですけど、そこがまず重要ななと思います。

川越: ありがとうございます。土屋さん、いかがですか。

土屋: ちょっと視点を変えて、私、子どもが生活する場って半分为家庭、半分为学校だと思っています。

そうすると、学校で彼らが幸せに暮らすにはどうすればいいかっていうのをよく考えます。そうした時に私は、学校、勉強する場所ですので、勉強がちゃんと分かるってことがすごく大事だと思うんです。なので、子どもの学習権の保障っていうのも。ちょっと居場所だけだと、抜けてしまうから。

特に最近、ヤングケアラーの風潮ですごく思うのは、家事担ってるでしょ、じゃあ家事を代行でヘルパーさんがやればいいんじゃないの？って話から、たくさんあるんですけども、私は、子どもたちの今の思いに共感するのであれば、今度のテストの点数をちゃんと伸ばしてあげる。だから、私は教育の現物で、直接、勉強を教えることだっていうふうに言うんですけども。

その子に直接、勉強を教えて、いろんなしんどい環境があるけれども、でも自分はやればできるんだって自信をしっかりと付ける、こういうこともすごく大事なんじゃないかな。結果的にはそれが、子どもの可能性を開いていくものにつながっているんじゃないかなと思うので。

課題っていう点では、結局、家庭に学校の勉強のできるできないが委ねられて、家庭の経済状況がそのまま学校の勉強のできるできないにつながってますので、その部分を、きちっと子どもの可能性を開いていくって点では、保障する必要があるんじゃないかなってことも、1つ子どもに何が今できるかっていう点で考えているところがあります。**川越**：ありがとうございます。多分、自己決定力を高めていくのにも当然、関わってくる話だということになるかと思います。上原さん、いかがでしょう。

上原：ありがとうございます。今の土屋さんのお話を伺っていて、いかに子ども時代を子どもらしく生きさせるかっていうことだと思うんですね。その中で、学校のことを考えてみますと、先ほど岩田先生もおっしゃっていたように、教員は、教員養成のなかで、福祉に関して学ぶ機会がないと思います。

しかしながら、文部科学省は、「令和の日本型学校教育」に関して、「学校は、全ての子供たちが安心して楽しく通える魅力ある環境であることや、これまで以上に福祉的役割や子供の居場所としての機能を担うことを求められている」と言っています。ということから実際は、今までも教員は、福祉的役割を果たしてきたと思います。でも先ほど申し上げたように、実際にそれを学んできたかということ、学んできたわけではなく、やはりそこで力が不足していることは否めないと考えております。

そういう中で最近、考えていることは、「学校福祉」いう考え方も、あってもいいのではないかとことです。私は「学校保健」に取り組んできましたが、学校保健と学校福祉、そこが並んできて、子どもの

背景についても支援をするような仕組みづくり、そこはやはり教員だけでは難しいこともありますので、スクールソーシャルワーカーをはじめ、他機関の方の連携っていうことが必要になってくると考えています。

教員は、「気付く」ですね。そして、「つなぐ」役目の方がいて、「見守る」。子どもたちは、もちろんまた学校に戻ってきますので、つないだ後も、そこでまた教員が見守りながら気付いていくってことが、重要ではないかと考えています。この「学校福祉」という考え方を今後、私も少し勉強させていただいて、広げていきたいと考えています。

あともう一つ、学校だからこそでできることということで、全員の子どもたちを対象にすることが必要かなと思っています。学校現場が相当忙しいのは十分理解していますが、例えば面談の時に、困った時を言えるような面談練習とか、全員に「困った時には、こう話すんだよ」みたいなイメージで、事前に練習するっていうのはどうかなってことを、1つご提案したいと考えております。学校だからこそでできることは、「対象が全員」がキーワードと考えています。

また、子どもたちには、可視化するものは、全員に可視化する。それから、子どもたちが使えるサービスがもしもあるとしたら、それを分かりやすく説明し、可視化できるものがあればよいのではないかと思います。学校だからこそでできることに期待したいと考えております。以上です。

川越：ありがとうございます。岩田さん、いかがでしょう。

岩田：あらためてやっぱり学校への期待というのを今、伺って、背筋の伸びる思いと、「いや、そうですか」っていう思いと両方あるわけですけども。先ほども言ったんですけど、もうマンパワーが足りないです。もう教師という立場でやれることは、これはやれる可能性あるよねってことはいっぱいあるんですけども、物理的にそれは人手が足りないですよっていう。

ほんとに教師の仕事ってとってもいい仕事だと思うし、やりがいのある仕事で、こんな魅力的な仕事はないって私は思ってるんですけど、だから、どんなにつらくても今まで辞めたいと思ったことは一度もないんですけど、でも日々の生活はやっぱり難しくて。さっきの気付く場面も、疲れていたら気付きにくいし、そういうこともあるので、やっぱり学校がどうか、教職員が担うべきこととそうでないことっていうのを、2016年の中教審も言ってますけど、もっと徹底的にやってもらわないと、そこは手が回らないのかなっていうこと。

それから先ほど土屋さんがおっしゃった、「勉強で

きるようにする」っていうことがほんとに大事なことなんですけれども、これがなかなか難しい。なぜ難しいかっていうと、やっぱり教育課程に無理がある。教えなきゃいけないこと、身に付けさせなきゃいけないとされていることが、時間数に見合わないっていうようなこととか。それから、過去に比べると1週間の授業実数が増えているんですよ。ゆとりが、学校全体に教師も子どももなくなってきているっていうことが絶対的にあるので、そういう中でって、すごく難しいんですよ。

一方で、勉強する時間を増やせばできるようになるかっていうと、そうでもなかったりします。やっぱり勉強に向かうモチベーションですよ。「勉強したい」とか「分かるようになりたい」というその力、そこをどうやって育てるかっていうところは、時間とはちょっと比例するものでもなかったりするので。

トータルに学校という場で、子どもたちの自己肯定感とかやる気ってものを育てていくっていうことを考えた時に、いろいろ考えていくと、私の中ではいつも最後は、身もふたもないことですよ、「もうちょっと人手が欲しい」というふうになってしまうのが現状で正直なところですよ。以上です。

川越：逆にどういったところを、地域の人と関わりながら、地域の人がカバーしてくれたりとかして。教職員を増やすっていうことができたなら一番いいかもしれないんですけど、教職員以外の方でやってもらえるところをやってもらうみたいな形で、支える人を増やしていくっていうことは可能なんですか。

岩田：これが意外と難しいと私は思っています。子どもと直接関わっている者だからこそできるということが多いんですよ。事務作業的なことをやってくださる方が、スクール・サポート・スタッフさんとか、最近は非常勤ですが入っています。これはとてもありがたいのですが、それも、なかなか「活用」にあたっての連絡調整で実際には時間がかかったりと難しかったりもします。

やっぱり私が今いるところと言うと、「あ、この子はケアが必要だ、これはもう学校だけでは難しい、われわれも専門性が足りない、助けてほしい」となった時に、なかなか蓄積のないところもあったりするので、スクールソーシャルワーカーさんとかがもっとたくさんいてくれるといいです。三郷市で2人という状況だと、本当に今、そういうケースも増えているので、なかなか難しい。例えば学校に1人いてくださるとありがたいです。

相談室も1部屋ありますが、たくさんの子が利用したいので、1部屋の中を区切って、同時にいたりできるようになっていますけれども、相談室も複数設置できるといいです。常勤の相談員さんも、今

はわれわれよりも勤務時間が短かったりするので、複数配置されるようになってくると、すごく助かります。

正直なところ、われわれは授業と学級の通常の指導で手いっぱいになってしまいます。それ以外のところで勤務時間外に家庭訪問したりします。授業の空き時間に家庭訪問をすることもあります。われわれは中学校だから、空き時間も少しはありますが、小学校の先生の空き時間はほとんどありません。でも、「この時間に家に行ったら会えるかもしれない」というケースがすごく多いんですよ。でもそこにはなかなか手が回らないので、そういう部分でも、人手が付いてくれたらすごくありがたいと思います。**川越**：ありがとうございます。大塚さん、いかがですか。

大塚：今までいろんな団体と連携して居場所をつくったりとかっていうのをやっていて、結構たくさんつくってはきていました。

ただ、例えばですけど、あからさまな暴力とかだったらポンと訴えることができるんですけど、ちょっと怪しいなってご家庭って結構多いんです。すごい怒鳴りつけたりとか、なんか軽くこづいたっていうか、蹴っ飛ばしたりとかしているようなご家庭は見るんですけど、それをどこにつなげたらいいかわからないんですよ。これ絶対、環境悪いだろうな、いいことないよなって分かってるんですけど、そこまでなんかいけてないというか、その先がどうしたらいいかわからない。

さっき言っていた、子どもと一緒に話してくれる、じっくり話を聞いてくれる人の存在も知らないんで、そういうスキルを持った方も、私の頭の中に今、浮かばないんで、そういったところが多分、今まではちょっと見て見ぬふりじゃないですけど、ちょっと軽く役所とか民生委員さんとかにつないで終わっちゃってるっていう形だったんですね。

ただ、こないだもみんなの前で怒鳴られてた小学6年生の男の子がいたんですけど、多分、あの子の気持ちを聞いたらいろいろあるんだろうなっていうのは、今、考えてまして。そういったことを相談するには、すごい専門スキルを持った方も必要だし、ある程度の知識を持った方っていう方々を養うことは、社協ができるのかなってちょっと考えたところでございます。以上です。

川越：松本さん、いかがですか。

松本：同じくその現場を見ていたんですが、社協としてできることって何だろうなって、私も考えていました。今やってる支援が子育て世帯の支援だったりとか、やっぱり小さいお子さんとかに目が向きがちではあるんですけども、中高生の子どもたちが集まる場所って、そんなに北本市はないのかなと。子

どもだけで、中高生だけで集まれる場所っていうのが、今のところないかなと思いました。

この前、地域の方で、そういう中高生の子たちが集まる学習所をやりたいなっておっしゃっている方もいたりしたんですけど、ただ「学習支援やるよ」とか「学習支援、始めました」という告知をしたとしても、子どもたちが行きたいわけではなくて、大人が行かせたい。

なので、やっぱりなかなか子どもが集まらない状況が増えているので、何らかのイベントをやってきたりとか、おやつが食べられるよ！とかっていうので集める感じです。子ども自身のスイッチが入らないと、やっぱり学習って難しいと思っていて、そういうのをもう少しどうやったら集まるようになるのかなっていうところは、ちょっと社協としてとか個人的にも考えていきたいなと思っています。以上です。

川越：ありがとうございます。山中さん、今までの話聞かれて、いかがですか。

山中：そうですね、あらためて思ったのが、民間の限界と行政の限界っていうことを皆さん、いろいろそこが課題ってことで悩まれてるんだなって実感しました。でも、使い古された言葉なんですけど、官と民の役割分担ってことを、あらためて必要なんだなというのを実感しまして。かつ、それを共有していくっていう仕組みが必要だなっていうのを、やっぱり思うというところなんです。

国もはじめとして、そのこの部分は重要性、やはりいろいろなもので出てきてるとこなんですけど、個人情報保護というところの難しさもあるんですけど、民間と行政との役割分担と連携というところの部分、しっかりやっていく必要があるんだなっていうようなことで、仕組みとしては思ったところなんです。以上です。

川越：ありがとうございます。じゃあ最後、論点、3つ目にいきます。3つ目は何かっていうと、子どもにとっての最善の地域をつくっていききたいですよね。ところが、やっぱりそれぞれの、さっき学校の話もありましたけれども、どうしてもやっぱ限界があって、その限界のところを何とかしてって言われても、そこはやっぱ限界なので、違うアプローチをとってあげないと難しいっていう話になってきますよね。

だから、こういったのがあったら学校も助かるのか。例えば支援をしている方々も、こういったものがあったら、もっと支援者同士が繋がったりとか、子どもと、もっといろんな形でアプローチがしやすくなったりとか、こういったのがあったらいいんじゃないかなとかいうところのアイデアであったり、ちょっと普段思っていることがあれば、おっしゃっていただければと思います。ブローハンさん、いかが。

ブローハン：思うことはいっぱいあるんですけど、僕、活動を始めてまだ5年たったぐらいです。それまで社会的養護っていう言葉が、里親と児童養護施設が同じだった、え、そうなんだ、みたいなぐらいのレベルからスタートしていますので、やっぱ皆さん、すごく視野が広いなと思いつながりながら話を聞いておりました。

子どもたちを地域で守っていく中で、自分たちは関わっているけれども、この先をどうやってつなげればいいのか、気付いたけど、そこからストップするっていうか。思うに、情報の一元化が大事なんじゃないかなと思っています。誰がどこにつなげるかを、ネットで調べれば何となく出てきたりするんですけど、じゃあいざ連絡すると、「いや、対象外です」となったりとか。で、今度、ほかの部署に回されるとか。

これは実を言うと、割と中高生の子たちって自分でやってるんですよ、今、当事者の子って。もう僕につながる子は「YouTube、見ました」と言って、僕のYouTubeを見て、ここから居場所につながったりとかするんですけど。今の子どもたちは情報収集するのがうまくなってきています。

ただ実際、何か起こった時に、岩田先生が「子どもにも長く関わってるからこそ、これ以上、言えない」みたいな、なんか誰か預ける人、ソーシャルワークの人にしかこれ以上は伝えられないみたいな、なんかどんどん狭められていく感覚があるので、やっぱり間につなぐ人がすごく重要だし、それこそ、その情報が最終的に、誰かが真ん中に立たなきゃいけないなと思っています。

例えばワンストップになるような、それが要対協なのかかもしれないし、分からないですよ、その地域にある、民生委員なのかかもしれないし、もしかしたら官のほうでやっているような行政サービスかもしれないし、ともかく、その情報がバラバラだなって。で、それぞれが必要だと思って、それぞれ支援が始めたりするんですけど、なんかそこから広がらないっていうのがあって、どんどんつくられるけれども終わってしまうとか。僕は、その一元化がともかく必要だと思っています。

一方で、大人たちが一生懸命こうやったらいいよねって世界を、今、子どもたちはちょっとずつ分かっているかもしれないけども、やっぱり届かないのは子どもの声を取り入れないからだ、と思っています。もし中高生にとって必要なものが何だろうと思えば、中高生の彼らに聞く機会をつくればいいんじゃないかなと思っています。

真ん中が誰なのかっていうところを考えた時に、中高生の子どもにしろ、それがまだ真ん中に来てないなっていう感覚があるので、ともかく子どもの声

を聞くっていう機会をつくる時間。それを学校、地域の中で育む機会、時間も必要になってくるかなと思っています。

川越：土屋さん、いかがですか。

土屋：先ほどのブローハンさんの話聞いて1つ思ったのが、1つというか、私がずっと常に言い続けているのは、「子どもから学ぶ」。子どもが今どんな現実を生きているのか、こんなふうに格差が広がっている中で、ほんとに今、暮らすのも大変って言うような子どもたちから、あ、こういう生活してるんだねって学ぶって言うことが大事だということ、言い続けてきたんですけども。

もう一つ、山中さんがおっしゃったことでふと思ったのが、関係機関と話すにしても、相手が今、なぜそういう話をするのかって言うことをよく知らなければ、われわれ話が通じないんです。学校の先生が、さっき岩田先生が、子どもと直接関わっているからできることが多いって言うふうに、おっしゃってくださったんですけども、40人のクラスの中で、一人一人違う人格が一遍に暮らしているわけです。その中で、子どもたちはどういうふうな思いを持って行動してるかっていうのは、やっぱり学校の先生にしか分かんないんですけども。

でもわれわれ、地域に住む子どもたちは、その先生のある種の苦悩って言うんですかね、話の中で、学校ってというのはどんな場所なの？って言う話で、自分の生き方を自己決定できる、それから自分と同じように他者も同じであるって言う、あとは集団の中で育つ、で、共に学ぶ、それは行事を通して、そういうのを今、こっちの言葉で言うと「地域に開かれた学校」とかっていいんですけども、先生たちはどんな苦勞をしているか、そこをわれわれはもっと知らなければいけないかなって。

でないと、学校にだけ過大な要求「先生は全部知ってるからやりなさい」みたいな。でも、直接責任に関しても教育基本法からなくなっちゃいましたし、そこのところをもっと尊重しなければいけないというふうに私はすごく思うんです。

なので、地域でまず何するかって言うと、子どもについて学ぶのが1つ、もう一つ、お互いについて学ぶということが1つ。で、そのプラットフォームみたいなものを、もし行政のほうで、今もかなりいろんな、社会教育だったりとか福祉教育だったりやっていますけれども、大体、参加してるのは70代のおじいちゃんおばあちゃんなんです。

そこのところを、われわれほんとに現役世代って、ものすごい忙しくて大変だと思うんですけども、お互いから学んでいくっていう機会、まさに今、川越先生がこのディスカッションをしていることだと思うんですけども、そういう機会をもっと増やし

ていくのがいいのかなって言うふうに思っております。

川越：上原さん、いかがですか。

上原：私もお互いから学ぶってことに共感しております。学校現場に勤めた時に、学校って壁が高いとか、塀が高いとか、なかなか中が見えないんだよねという声を聴きました。今、考えてみると、そういう躊躇が生じた背景は、やはりお互いのことを知らないってことではないかと思えます。

お互い、学校、地域ができることとできないことは、あるので、やるべきこと、やらなくていいこと、その範囲をしっかりと理解することではないかと思えます。私はこの話をさせていただく時に「可能性と限界」って言う言葉を使わせていただいています。お互いに可能性と限界を理解した上で連携をするって言うことが、重要だと考えます。

今日もこのように関係されるみなさんが、顔合わせしてますけども、一度でも顔を合わせると、何かの時に連絡してみようかなとか、お力添えいただくかなと思えるので、このように顔が見える関係づくりができるような場を、やはり多く設定していくことが重要ではないかと思っております。以上です。

川越：岩田さん、いかがでしょう。

岩田：今、上原先生がおっしゃった、顔が見える関係というのは、本当に大事なことだと思います。今回のお話を頼まれてお引き受けしようと思った時に、「地域づくりの課題」について、「そもそも地域って何だ？」ということ、「地域というものをこう捉えて、こう話をしよう」ということを明確にできないまま、実は私は今日を迎えています。

地域って誰のことを指しているのか、どういう立場の人のことを指しているのかということが、なかなか難しい。いろいろな人が地域にはいるので、どういう人となりが子どもの利益になるのかというの、実はそんなに簡単な話ではないだろうというところがあります。これについては、それぞれ地域性もあるだろうし、いろいろあるだろうから、なかなか難しいのと思いました。

実は、十何年前、前任校に勤務していた時に、卒業して3年たつある女子生徒がふらっと訪ねてきました。この子は高校進学を諦めていたんですね。勉強が好きではないということと、やっぱり経済的に厳しかったということで。生活保護を受けたり受けなかったりを、行ったり来たりしていました。（「勉強したくない」というのは、本当に「勉強したくない」ということなのかどうかということは、先ほどの土屋さんのおっしゃったことで考える必要があると思えます。）ところが「バイトをするにも中卒じゃなかなか厳しい。今からでも高校に通えないですか」

と、18歳になる年に相談に来たことがありました。その時に私は、その時になって初めて、どういう施策があるかとか、どういう窓口があるかということ調べて、その卒業生と一緒に社会福祉協議会に相談に行くということをしたことがありました。

やっぱりわれわれは教員の中でずっと仕事をしているから、学校で手に負えないとなった時に、どういう窓口や、どういう活動をしている人たちがいるかということ、実はあまりよく分かっていません。そういうことが分かっていると、また違ってくると思いました。しかもそれが、「この間お話しした、あの方の所だね」となったら、非常に心強いと思えました。以上です。

川越：ありがとうございます。大塚さん、いかがです？

大塚：できるところ、できないところっていう中で、地域づくりってわれわれ、一応、専門でやらせてもらってるんですけど、よく分からないんですよ、実際ほんとに。いろんな人があるんだよね。いろんな地域もあるし、いろんな考えがあるので、みんな「じゃあ、こうやっていこう」って言ったって、まとまらないことが結構多いんですね。

だけど今日のこども家庭庁の話とか、子どもを真ん中に据えて話を聞こうって話って、結構、知らない人が多いのかなと思いました。昔の、戦後とかを生き残った人たちは結構、教えてやるんだとかって、こうやってきたからこうやるんだよっていうのが、みんなたけているんだけど、多分、そういったことはやってきてないっていうか、そもそもそういうふうに教育を受けていないので…。

ただこういうのって、いろんな考えっていうか、変わっていくので、こういった考えもあるよっていうのは、知らせることはすごく大事だと思います。そういったことがわれわれはできるかなって思いました。ほんとにちょっとずつですよ。ほんとに100人に言っても、「すごい分かった」っていう人は多分、10人とか20人ぐらいかもしれないですけど、そういったように裾野を広げていくことがわれわれのやるべきことなのかなっていうのを、あらためて感じたところです。以上です。

川越：松本さん、いかがですか。

松本：同じようなことなんですけど、やっぱり勉強会とか講座ってなると、ここにもここにもっていう同じ方が集まっていっちゃうので、いろんな視点を変えて周知をすることと、想像力を持って相手の立場でどうなのかな。っていうのをちょっと想像して支援してほしいなというところを、どうやって広めていけばいいのかと今すごいグルグル考えています。自分もそうなんですけど、情報のアップデートって、やっぱり年を取っても必要だなとほんとに

思っていて。内部でもそうなんですけど、やっぱりちょっと新しいことを皆さんに知ってもらえるように、どういうふうに周知していけばいいかなと考えていました。

あと、岩田先生が先ほどから「学校が、学校が」って言われているんですが、先ほど紹介した制服のリユースの件で、学校とか教育委員会とか、とてもハードルが高くて壁がちょっとって思ってたんですけど、実際に教育長にお会いしたりとか、学校で校長先生とかとお話をしたり、PTAの方にご連絡して、「こういう活動をやりたいんです」ってお話をした時に、皆さんもうほんとに一言目から、「まあ！いいことじゃないですか」とか、「これを反対する人はいないでしょ」みたいな形で、とても協力的で実現できたところがあります。

学校には毎年、ごあいさつに行ったり、訪問するようにして、つながりを切らさないようにしながら、活動を進めていきたいと思っております。

川越：山中さん、いかがでしょうか。

山中：いろいろ事業の参考にさせていただける、いいネタをいっぱいいただいたなと思ってる所でございます。ありがとうございます。思っている以上にみんな知らないんだよということは、ちょっと今回、響いたところです。それと連携の中で、やはり顔が見えるって、フェース・トゥ・フェースの大事さっていうのも、皆さん、現場の声ということでは出てくるんだなってことを、あらためて実感しました。

なので、やはりそういった仕組み、1つ県も始めましたが、地域のネットワークづくりっていうのが重要なかなっていうのを、思ったところでございます。ネットワークとか、そういったこと通じて、日頃から顔が見える関係をつなぎ、何かあった時にお互い話ができる環境づくりっていうことが、まずは大事なのかなと。

あとは、子どもから声をほんとに聞くっていうのが重要なんだなっていうのを実感しました。だから、ほんとに単純に「じゃあ聞けばいい」っていうものではないっていうのを、先ほども、思っておりました。そこをどうやって聞き出す仕組みなのかなって、ちょっと繰り返しになっちゃうんですけど、そこをやっぱり行政としては考える必要があるなっていうことを、実感したところです。以上です。

川越：ありがとうございます。ブローハンさん、追加ある？

ブローハン：最後はしゃべりづらいですよ（笑）。ちょっとじゃあ、今の山中さんの言葉に対して、少し何か助けになればいいなと思うんですけど。子どもの声を聞くって、本人から聞けばいいんじゃないのって私も思っていて。それは多分、この話、何回

も出てるかなと思うんですけど、子どもの視点、子どもの現実、子どもがいる世界に合わせるっていうのがすごく重要なと思っています。

僕が一時期、提案していたのは、学校現場であれば、タブレットの中にそういう支援をしてくれるような団体さんの情報を、一個でも置いとけばいいんじゃないかみたいな話を、ちらっと提案したこともあったりしたんですけど。いわゆる例えばタブレットの中に、子どもたちが普段使ってる中に自然とある、それは匿名性があったり、秘密が守られたりとかする、そういうのがあれば、つながりやすいんじゃないかなと思ったんですけど。

もっと手前で言うと、遊びは少なくなっていると私は感じています。子どもは集団の中で育つ中にも、僕はゲームの中で育ったっていうか、ゲームを通して友達とさらに仲良くなった経験もあるんですけど、やっぱり遊ぶ場所が少なくなっているの。僕は東京都の杉並区で育ったんですけど、中高生が通える、ゆう杉並ってような場所があって、そこは中高生の子たちの声を基につくった施設です。

そこにはバスケットボールがあったり、音楽室があったり、勉強できるところがある、ライブ会場があるとか、ダンスできるとか、そういう子どもがやりたいが真ん中にあるんだけど、そこからアンケートとして、実はこういう家庭に困ってるんだとか、子どもたち同士の会話の中で、さりげない困り事が発覚することがあったりとか。

なので、なんか遊び場からつながるみたいな視点もやっぱり必要になってくるのかなと思って。なので、守るためだけに、助けようっていう仕組みをいくらつくっても、そこに子どもたちがアクセスしないので、子どもたちがアクセスしやすい、いや、子ども視点に立ったアクセスできる場所をつくるべきかなと思っています。

ブローハン：僕、カナダに訪問、視察で行ったんですけど、コミュニティハブがすごく成り立っていて、予防として、親御さん、親が気軽に来れる公民館みたいなスペースがあるんですけど、そこがすごく機能していて。そこに親も集まるし、遊び場もあるから、子どもたちも来れる。なので、情報が一元化されてるっていうか、そこに行けば取りあえず情報にはつながるみたいな、実際にある場所にみんながアクセスすることによって、そこに専門性がある人がいて、そこからつなげるようなことがあったりとか。

そういうコミュニティハブの機能化っていうのも。そこに、さっきの遊び、そして守る、親が子育てしやすい環境につながるとすれば、そもそも予防につながるよねっていうような場所があったので、そこも最後にお伝えして、今、取りあえず治まりました。

川越：ほかの方、よろしいですか。追加発言があれば。じゃあ土屋さん、どうぞ。

土屋：最後に。子どもたちの全戸訪問って、実は「こんにちは赤ちゃん事業」って言って、0歳の時に、全ての生まれた赤ちゃんを保健師さんが訪問するっていうのがあるんですけども、その後って実は小学校、中学校の先生たちが、全ての家に9年間、家庭訪問してくれていたんです。私、それすごく大きかったなって思います。

ただ、今、先生たち多忙化で、とてもじゃないけれどもそんな時間はない。私は、ほんとは子どもに関わる時間と教材研究の時間は、最優先で保障すべきだと思っていますけれども、とはいえ、今、0歳の時に全戸訪問して以降、誰もお家の中に入るっていうことがないんです。

私は、あとは小中学校の家庭訪問が復活すればいいとは思っていないですけども、でも誰かが全戸訪問を、小学校3年生の時、6年生の時、中3の時みたいな形で。ほんとに全戸訪問です。全部やる、決められてるからやる、そういう全ての子どもたちを保障するんだったら、そういう仕組みが必要なんじゃないかなっていうふうなことをちょっと思っております。以上です。

川越：ありがとうございます。ほかの方、よろしいですか。このシンポジウムも、いろんな立場の方に来ていただいているんです。要は、それぞれの方って自分の世界で当然、生きておられるので、ほかの世界を意外と知らないというのが普通なんですよ。

それと、自分らの価値観で物事を考えるっていうことにずっと慣れてきているし、同じような価値観を持った人、集団で生きてるんで、あんまり価値観が変わらないんですよ。だから価値観を変えようとする、変えに行くか、周りのことを知ることによっておのずと変わっていったらどうかの、どちらかしかないかな。で、多くのやり方は後者のほうなんだらうなという気がして。

いろんな方が、お互い自由に意見が言える？ だからお互いの価値観を押し付けずに自由に意見が言えるような場をつくっていく中に、当然、当事者の人が入ったりとかお子さんが入って、提案をしてもらうというところをつくっていくっていう世界が、非常に自然な形なんじゃないかなという気がいたします。

高齢者の支援をやっていると、やっぱり高齢者の方って、子どもへの支援ってすごい乗り気ですよ。多分、社協の方とかもやっていると、テーマとして子どもの支援をやろうとかいうと、高齢者は乗ってくるんですよ。だから、「子どもの最善の利益を目指そう」という、みんな目指すところをちゃんと置いた上で、そうすると、子どもの最善の利益って

うのは子どもにしか分かんないわけですから、子どもに聞くの当たり前の世界なんです。

もう子どもに聞いて、あとは、子どもに聞いたことをどう実現するかを大人が考えりゃいいって話かなど。その中で実現しようとする、自分らでできることとできないことがあるから、できないところは「誰かできる人、おれへんかな」というふうに見ていく？そこを例えば社協さんがデータベース化して、実はこんなことやっている人が地域にいるよというのが分かってくると、いい。

あと、地域につながろうとすると、「誰々さん」じゃなくて、「こんな思いを持ってやってる人」とかのほうが、より意味があるかもしれないですね。すごく過去に例えば障害児を抱えていたお母さんが、障害児のために何かやってるって、よくあるんですよね。そういった人たち、絶対やんなきゃっていうんで、強い思いを持って取り組まれてますよね。だから、その方々が何でNPOを始めたのかとか、何でそんな支援をやろうと思ったのかとか、そういったところが実は結構大事で、そういったところも分かった上でお互い知って、関係性をつくっていくというのが大事かもしれないですね。

こういった形で、お互いできることとできないこと、特にできないことを言うっていうのがすごく大事で、できないところを言うてくれたら、ほかの人が手出そうかと思うんです。あとは、手の出し方をどうしたらいいかというところを言うていただけると、手がすごく出せる。だから連携が深まっていくということなんで。

まずみんなで、「子どもの最善の利益は何か」というところから出発して、それをどうやって実現するかという中で、自分ができること、できないことを出し合って、そしてお互い持っているものを足して、結果につなげていくとなってくると、おのずと地域づくりの世界になっちゃうということになるので、いろんな方が安全に行ける場所とかをつくりつつ。

そこが、居場所とかそういう話じゃなくて、遊び場とか、もっと行きやすそうなネーミングの所のほうが、もしかしたらいいのかもしれないし、それを発信するのが、行政がなんか発信するんじゃなくて、SNSで学生さんとかに発信してもらったほうが、よっぽど、みんなが見るんじゃないかなど。その辺は大人が考えるより、お子さんとかが考えてもらったほうが、効果的なアプローチが図れるんじゃないかなどということで、効果的な対策を打つためにも、やっぱりお子さんの話を聞く、お子さんだったらどうするかを聞くというのが、実は結構、大事なポイントなんじゃないかなどという気がいたします。

要は今、認知症の話も、本人中心という話がより

濃く出てるんです、今。子どもも同じなんです。看取りの話のACPも実は一緒なんです。全部、本人がどうしたいのかが出発点なんです。だから、そこからまずは出発できるような状況を少しでも整えられていけば、このシンポジウムも意味があったかなどという気がいたします。

ということで、今日は7名の方にシンポジストとしてお話をいただきました。最後、一言ずつ、どう感じたかを、一言ずつ、感想レベルで結構です。山中さん、いかがですか。

山中：勉強になりました。あらためて、立場の違う方からいろいろ話を伺うことの重要性を実感した次第です。ありがとうございました。

川越：松本さん。

松本：まだ頭がグルグル、いろんなことを考えさせていただきました。勉強になりました。ありがとうございました。

川越：大塚さん。

大塚：ありがとうございました。確かに顔の見える関係性、今日、多分、出会った方々っていうのは、私も一生忘れないと思いますし、もしかしたらこの後、お声掛けしちゃう可能性もありますので、こういった場っていうのはすごく大事だと思いました。あらためて、ありがとうございました。

川越：岩田さん。

岩田：すごく困っている子どもがいた時にどう救うか、という発想で、ここまで私は来ましたが、今日お話を伺って、そうではなくて、自然とそういう人たちが声を上げられる、みんながアクセスできるものをどうつくるかというふうに、発想を変えていかないと駄目なんだなと思いました。ありがとうございました。

川越：上原さん。

上原：貴重な機会をいただきまして、ありがとうございました。子どもの最善の利益に向かって、同じ方向を向いている方たちがこんなにたくさんいることに、大変感激いたしました。ありがとうございました。

川越：土屋さん。

土屋：貴重な機会をありがとうございました。私も、同じように感じてる方たちがこれだけいる、それから、主張してくださってる方がいるっていうことは、大変うれしく思います。今日はありがとうございました。

川越：最後になります。ブローハンさん。

ブローハン：今日はいろいろとわがママを言った感じになりましたけど、貴重な機会をありがとうございました。私自身は、ほんとに何もない知識から、ただ当事者としての意見を伝えていたところ、これが支援者として実際につながることで、そこから支援

団体さんのことを知る、そして、そこからまた広がっていく感じをずっと感じてたんですけど。

今日は普段、会わない分野、重なっている分野でもあるのに会わない分野、そして考え方だったり、できないことをちゃんと伝え合うみたいところが、すごくいいなって思っただけ。それこそ普段、学校の先生にお話をする機会があったんですけど、これがこうして、できない話が、これができないんだってはっきり言ってもらえたほうが、「そうか、そういう視点があるか」みたいなことがあったり、「あ、ヤングケアラーってそういう視点か」みたいな。

なんか今日、そういった垣根を越えて、それぞれの持っているものを出し合い、持ってないところを譲り合うみたいな、なんかそういう考え方を持った多世代による組み合わせがすごく面白いなと思いつつ、話をさせていただきました。

川越：長時間にわたりまして、さまざまご意見いただきまして、ありがとうございます。要は何のためにやるのかっていうのがすごく大事で、いろんな価値観を抱えてる方がみんなで一緒にやろうとすると、みんな感じてるものとか使ってる言葉も違うので、その方々が共通で目指すところっていうところを、ちゃんとセットするのがすごく大事で。

だから、お子さんにとっての最善の利益っていうのが、そこが目指すところなんですよ。そこをみんなで実現していくところをやっていくと、おのずと、このテーマから広がっていくと、高齢者にとっても住みやすい世界になっていくんじゃないかなという気がいたします。

ということで、子どもを切り口にして、いろんな形で地域づくりを推進できるような、そんなことに一役を担えればということで、このシンポジウムを今日させていただいたということです。皆さん、いかがだったでしょうか。以上をもちまして、このパネルディスカッションを終わりたいと思います。シンポジストの方、ありがとうございます。